

松戸市・沼南町

# 高柳新田所在野馬土手

——高柳土地区画整理に伴う埋蔵文化財調査報告書——

1 9 8 9

住宅・都市整備公団  
財団法人 千葉県文化財センター

松戸市・沼南町  
たかなぎしんでんしよざいのまどて  
高柳新田所在野馬土手

——高柳土地区画整理に伴う埋蔵文化財調査報告書——



1 9 8 9

住宅・都市整備公団  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

千葉県北西部は、首都東京に接し、急速な発展をとげています。最近の宅地需要の急増にもない、この地域における宅地開発はますます重要な課題となってきました。このような状況に対応するため、住宅・都市整備公団首都圏開発本部は、松戸市及び沼南町の高柳新田地区の土地区画整理を実施することとなりました。

ところで、調査地周辺は、本遺跡の南方3kmに位置する「小金中野牧の込跡」が千葉県の指定史跡になるなど、江戸時代の牧に関係する遺跡が多く、野馬土手が縦横に伸びています。

このため、千葉県教育委員会では、土地区画整理予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、住宅・都市整備公団をはじめ、関係諸機関と慎重に協議を重ねた結果、松戸市高柳新田及び沼南町高柳新田に所在する野馬土手については、開発計画の中で緑地として残せる部分については現状保存とすることとし、やむを得ない部分について発掘調査による記録保存の措置を講じることとなりました。

発掘調査は、千葉県教育委員会の指導のもとに、当センターが担当することとなり、昭和63年10月1日から10月31日まで調査を行いました。

発掘調査の結果、緩斜面及び谷部に位置する野馬土手の構築方法を明らかにすることができました。また、野馬土手に伴う溝を検出しました。以上の成果は、これまでの流山・柏・松戸市などの報告例とともに、今後、東葛地方の野馬土手を理解する上で貴重な資料になるものと思われます。

このたび、整理作業も終了し、調査結果を報告書として刊行することとなりましたが、本書が学術的な資料としてはもとより、文化財の保護、普及のため広く一般の方々に活用されることを望んでやみません。

終わりに、地元関係者、住宅・都市整備公団首都圏開発本部の御協力と千葉県教育庁文化課、松戸市教育委員会、沼南町教育委員会の御指導、助言にお礼を申しあげるとともに、調査に協力していただいた調査補助員の皆様心から謝意を表します。

平成元年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 岩瀬良三

## 凡 例

1. 本書は松戸市高柳新田字<sup>たかやなぎしんてん しやきりうぢ</sup>切内162-2, 東葛飾郡沼南町高柳新田字<sup>たかやなぎしんてん のまどこ</sup>切内160-2他に所在する高柳新田所在野馬土手の発掘調査報告書である。
2. この調査は、高柳土地地区画整理に伴う事前調査として、千葉県教育委員会の指導のもとに住宅・都市整備公団との委託契約に基づき、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、昭和63年10月1日から同年10月31日まで行い、整理作業は、11月1日から11月30日まで行った。
4. 調査・整理作業および本書の作成にあたっては、当センター調査部長 堀部昭夫・部長補佐 古内茂・班長 大原正義の指導のもとに、主任調査研究員 糸川道行が担当した。
5. 本書の執筆・編集は、糸川が担当した。
6. 本調査で使用した遺跡コードは、305-004である。
7. fig. 1 は、国土地理院発行の5万分の1、野田・龍ヶ崎・東京東北部・佐倉を使用した。
8. 本書に使用した航空写真は、京葉測量(株)の撮影になるものである。
9. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、住宅・都市整備公団 首都圏都市開発本部 高柳宅地開発事務所、千葉県教育庁文化課、松戸市教育委員会、沼南町教育委員会の関係者各位をはじめ、当センター職員等多くの方々から御指導、御協力を賜りました。ここに謝意を表します。

# 目 次

	頁
I はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡の位置と環境	2
3. 調査の方法と経過	3
II 遺構	6
1. 野馬土手1	6
2. 野馬土手2	12
III まとめ	15

## 挿図目次

fig. 1 調査地位置図	fig. 7 Dトレンチ断面図	10
fig. 2 調査地周辺図	fig. 8 Eトレンチ	12
fig. 3 調査地全体図	fig. 9 Eトレンチ断面図	13
fig. 4 A・Bトレンチ	fig. 10 Aトレンチ発掘風景	14
fig. 5 C・Dトレンチ	fig. 11 Eトレンチ実測風景	14
fig. 6 Cトレンチ断面図 001・002平面図	fig. 12 小金牧各内牧の分布図	8.9

## 図版目次

PL. 1 高柳新田所在野馬土手周辺の航空写真 (1967年3月19日撮影)	PL. 5 1. Dトレンチ野馬土手1断面(南から) 2. Dトレンチ野馬土手1地山整形 (東から)
PL. 2 1. 野馬土手1近景(1)(北西から) 2. 野馬土手1近景(2)(北から) 3. 野馬土手1近景(3)(南東から)	PL. 6 1. 野馬土手2近景(1)(西やや南から) 2. 野馬土手2近景(2)(南から)
PL. 3 1. 野馬土手1近景(4)(南東から) 2. Aトレンチ001・002(東から) 3. Bトレンチ001・002(東やや南から)	PL. 7 1. Eトレンチ 野馬土手2・003断面 (西から) 2. Eトレンチ 野馬土手2断面 (南西から)
PL. 4 1. Cトレンチ001・002(北西から) 2. Cトレンチ001・002(南東から) 3. Cトレンチ野馬土手1遺存部断面 (南東から)	



# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

千葉県の北西部は都心に近いこともあって、早くから、各地で宅地開発が進められてきている。松戸市と沼南町の行政境に位置する本地域もその例外ではなく、宅地開発に伴う土地区画整理が実施されることとなった。

昭和58年7月、用地取得に当たった住宅・都市整備公団 首都圏開発本部から千葉県教育委員会へ「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会があり、昭和58年8月に現地踏査を実施したところ、用地内に野馬土手の所在を確認し、その旨を住宅・都市整備公団へ回答した。その後、県教育庁文化課では、高柳新田所在野馬土手の取扱いについて関係機関と慎重な協議を重ねた結果、一部の保存区域を除いてはやむを得ず記録保存の措置を講ずることで協議が整い、調査者に財団法人千葉県文化財センターを指定した。これに基づいて当センターでは、昭和63年度事業として、住宅・都市整備公団と委託契約を締結し、10月当初から発掘調査を実施することになった。

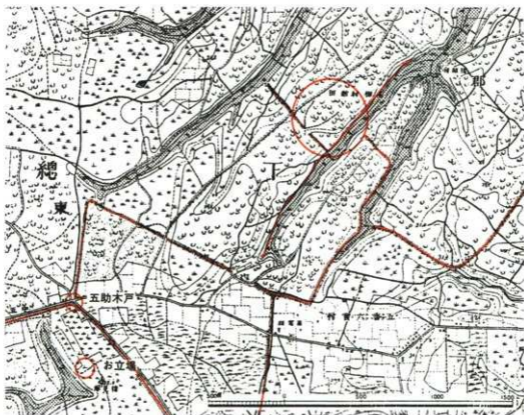


Fig. 2 調査地周辺図(明治17年参謀本部陸軍部測量局作成)

## 2. 遺跡の位置と環境

千葉県北部には、標高20～30m前後の平坦な下総台地が広がっている。下総台地の北部には、現在、茨城県との県境を画して利根川が流れ、また、手賀沼・印旛沼という比較的大きな湖沼が存在する。以上の水域に流入する中小の河川およびその支谷は下総台地を樹枝状に開析し、複雑な地形を作り出している。また、下総台地西南部は東京湾に注ぐ中小河川によって開析されている。高柳新田所在野馬土手が位置する中野牧そして中野牧を含む小金牧はこのような下総台地の北西部に広く展開している。高柳新田所在野馬土手は手賀沼に注ぐ大津川に流入する小河川によって開析された支谷間に立地する。野馬土手1は二つの支谷を分断して走り、野馬土手2は野馬土手1とほぼ直交して台地斜面と低地の谷との傾斜変換点に立地する。標高は谷から平坦部へと走る野馬土手1が19～27m、野馬土手2は18mである。

PL. 1に使用した航空写真は1967年に撮影したものである。当時は松戸市五香六実周辺も宅地造成が成されておらず、後述するが現在削平された野馬土手1の北半部も遺存している。この20数年で遺跡周辺は大きく変貌しており、今後ますます開発が進むことが予想される。

松戸市は貝の花貝塚<sup>1</sup>・子と清水貝塚<sup>2</sup>等、主に縄文時代を中心として豊富に遺跡が存在する。また、沼南町も近年になって六釜内遺跡等、調査例が増えつつある<sup>3,4</sup>。しかし、本遺跡周辺は包含地はあるがこれまでに大規模な調査は行われていない。本遺跡は江戸時代の遺構と思われるため、ここでは当該時期の遺跡に限定して概観することにする。

野馬土手の調査例としては本遺跡の西南約2kmに元山所在野馬土手<sup>5</sup>がある。当センターが昭和58年度に調査を実施したもので、基底部の幅6.5m前後、高さ3m前後を計る野馬土手である。遺物は近世陶器が少量出土した。また、本遺跡の南約3.5kmの位置には、鎌ヶ谷市串崎新田字東里所在野馬土手<sup>6</sup>がある。これも昭和62年度に当センターが調査を実施したもので、南北に延びる野馬土手の東側に堀を検出した。野馬土手の基底部幅は5～6m、土手頂部から掘底部まで約4mを計る。遺物は出土しなかった。元山所在野馬土手のすぐ近くの交差点はかつて五助木戸があったところである。木戸は野馬土手と道の交差する場所に作られたもので、馬の逃亡防止、通行人の人別改め等を目的とした。元山所在野馬土手の南約500mには「お立場」があった。「お立場」は將軍鹿狩りの際に設けられた陣所であり、当時、鳥井戸大塚といわれていた塚をさらに大きく高く築きあげたものである。現在は消滅して存在しない。本遺跡の南約3kmには「小金中野牧の込跡」がある。込跡は野馬を捕えるための施設であり、各牧に設けられている。「小金中野牧の込跡」は保存状態が良好で県の指定史跡になっている<sup>7</sup>。さらに西に目を転ずると、本遺跡から約4kmに「金が作役所跡」がある。これは下総牧を統括した組織で、八代將軍吉宗による享保の改革に伴い設置されたものである。



### 3. 調査の方法と経過

調査は任意のトレンチを設定して行った。遺構の性格上、とくに地区割りをせずにトレンチ両脇の基準点を国土方眼座標（第IX座標系）に置換する方式を採用した。トレンチは野馬土手1にA・B・C・Dの4か所、野馬土手2にEトレンチの1か所、計5か所を設定した。各野馬土手の現況は、野馬土手1が調査範囲北端に道路を隔てて柏市逆井地区に続く土手が存在するもの、その南には土手の確認できない部分があり、さらに二重土手状の部分、土手のない部分と続く。南半分は整った一重の土手が確認でき延長約300mを計る。南端部、野馬土手2との間には約40mにわたって土手が存在しない。野馬土手2は、谷部と低地部を画するように台地斜面裾部に添って南西から北東に伸び、約350mを計る。西半分は遺存状況が悪い。トレンチA・Cは二重土手状の南北の土手の存在しない部分に木戸跡の検出、Bは二重土手の構造解明、D・Eは各土手の遺存状況の良い部分での構造解明を目的として設定した。

調査前の現況写真、杭の設定を行った後、発掘調査は10月4日から開始した。まず、B・Dトレンチから着手し、Bトレンチでは溝2条を検出した。次にAトレンチの調査に取りかかった。続いて、Eトレンチ野馬土手2の土手部分およびCトレンチの遺構確認面までは、小型重機によって掘り下げた。A・B・DトレンチおよびC・Eトレンチの溝部分は人力で発掘した。Aトレンチの調査ではBトレンチで検出した溝とつながる2条の溝を検出した。Aトレンチの調査が終わる頃、Dトレンチ土手部分の発掘も地山基盤層に達し、地山整形面を検出した。Dトレンチの次にCトレンチの調査に着手した。その結果、CトレンチにおいてもA・Bトレンチとつながる2条の溝を検出した。また、溝の西側に野馬土手1の土手下半部を確認した。これにより野馬土手1北半部の土手が存在しない部分にも元は野馬土手が通っていたことが分かった。Cトレンチの調査にやや遅れてEトレンチ、野馬土手2の調査を行い、溝を土手と北側台地斜面との間に検出した。土手盛土・溝の断面観察・記録を行って高柳新田所在野馬土手の発掘調査が終了した。なお、全てのトレンチにおいて野馬土手に伴う遺物は出土しなかった。発掘調査と並行して業者委託による野馬土手の地形測量を実施した。そして、発掘調査終了後、杭測量を実施して10月28日に高柳新田所在野馬土手の現地での全ての調査が終了した。

#### 註

- 1 八幡一郎『貝の花貝塚』東京教育大学文学部考古学研究報告II 1973
- 2 『子和清水貝塚』子和清水貝塚発掘調査団 1973
- 3 『六釜内遺跡』沼南町埋蔵文化財小報第1集 沼南町教育委員会 1983 『六釜内遺跡』沼南町埋蔵文化財小報第3集 沼南町教育委員会 1984
- 4 『天神向原遺跡』沼南町埋蔵文化財小報第2集 沼南町教育委員会 1984
- 5 『大井東山遺跡・大井大畑遺跡』財団法人千葉県文化財センター 1987
- 6 『松戸市五香六実元山所在馬土手』財団法人千葉県文化財センター 1983
- 7 北総開発鉄道建設に先立って実施された調査であり、報告書は昭和64年度刊行予定である。
- 8 『千葉県の文化財』千葉県教育委員会 1980





## II. 遺構

### 1. 野馬土手1

野馬土手1の調査対象面積は約2,900㎡、調査範囲での総長は、約300mである。野馬土手2とはほぼ直交するように築かれている。南半部は整った野馬土手が走っているが、野馬土手2から約40mの部分は土手がとぎれている。これがもともとの地形であるか、調査期間の制約によりこの部分に発掘区を設定することができなかったため明らかでない。明治17年参謀本部陸軍部測量局作成の地図では野馬土手1と野馬土手2とはつながっている。野馬土手2の西半部が現状を損なっていることを考え合わせ、もとは存在していたと推定しておく。一方、北半部の約120mは現地表面において一重の野馬土手が存在せず、地形が乱れている。一部、二重土手状を呈し、その南北は土手がとぎれている。特に南側は約60mにわたって平坦面となっている。

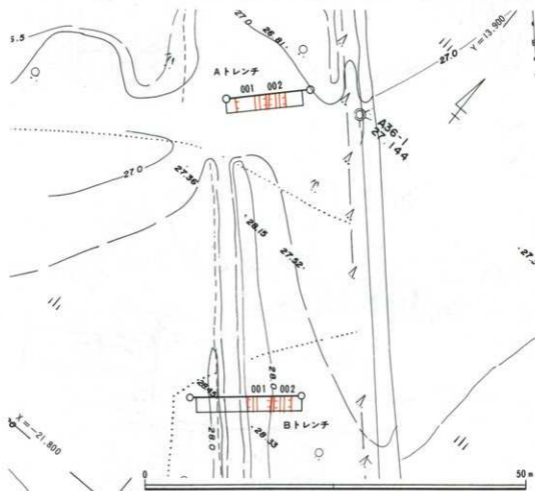


fig. 4 A・Bトレンチ

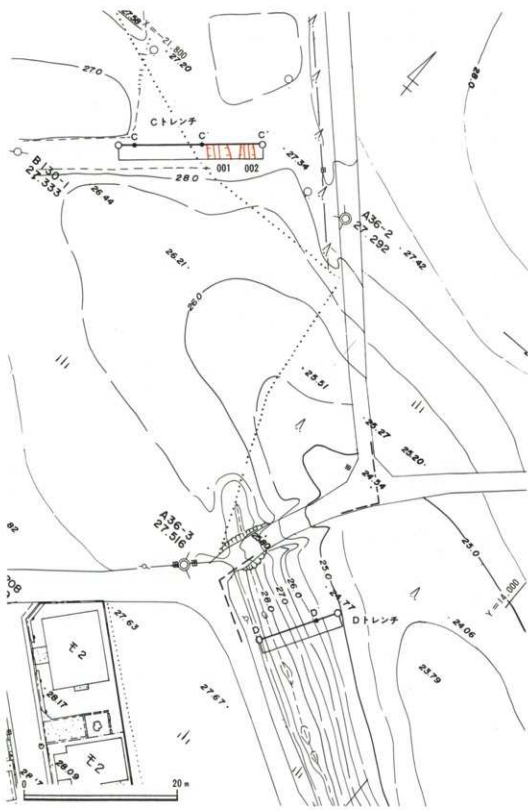


fig. 5 C・Dトレンチ

野馬土手1に設定したトレンチはA・B・C・Dの4トレンチである。A・B・Cの3トレンチにおいて二条の溝を検出し、001・002の遺構番号をふつたが、説明は各トレンチの項で行うことにする。以下トレンチのアルファベット順にしたがって、調査成果を説明する。

#### Aトレンチ

調査地の最も北側に設定した幅2m、長さ11mのトレンチである。Aトレンチの北側は一重の土手があり、柏市逆井方面へ続いていく。一方、南側は二重土手状になっている。Aトレンチの位置は土手がとぎれて平坦になっているところであり、木戸跡の検出を目的としてトレンチを設定した。現地表高は27.3m。現地表から地山、遺構確認面まで40cmを計る。地山層は橙褐色のローム層で、武蔵野ローム層に相当すると思われる。

検出した遺構は二条の溝である。トレンチ長軸方向を便宜的に東西とすると、西側の溝に001、東側の溝に002の遺構番号を付した。001の遺構確認面での幅は4m、底面幅は2m、遺構確認面から底面までの深さは55cmを計る。002の遺構確認面での幅は2.2m、底面幅は40cm、遺構確認面から底面までの深さは55cmを計る。二条の溝は隣接して並行に走っていることと、覆土の堆積状態から、同時に機能していたと思われる。両者を一体とした場合、001・002を合わせた幅は6.5mである。出土遺物なし。溝を検出したため、木戸跡の検出は出来なかった。

#### Bトレンチ

野馬土手1北半部の二重土手状の部分に設定した幅2m、長さ14mのトレンチである。現地表高は27.40～28.40m。「二重土手」間は現状では立ち上がりの緩やかな溝となっている。調査前はこの溝が、ある程度の深さを持つ野馬堀と予想していたが、発掘したところ地山面まで10cmの浅さであった。地山層はAトレンチ同様、橙褐色のローム層である。一方、「二重土手」のうち、西側の土手の土層は黒褐色土を主体とし、一部に橙褐色土を含んでいた。東側の土手の土層も黒褐色土を主体とし、所々、橙褐色土層となっていた。東側の土手の下部、地山面において、Aトレンチで検出した溝とつながる二条の溝を検出した。001の遺構確認面での幅は3.2m、底面幅は60cm、遺構確認面から底面までの深さは60cmを計る。002の遺構確認面での幅は2.3m、底面幅は60cm、遺構確認面から底面までの深さは80cmを計る。001・002を合わせた幅は5.7mである。出土遺物なし。この二条の溝の検出および「二重土手」間の「溝」の覆土がほとんど

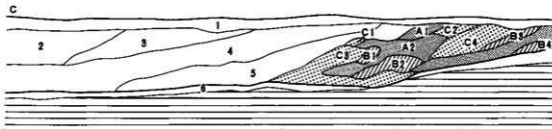


fig. 6 Cトレンチ断面図 001・002平面図

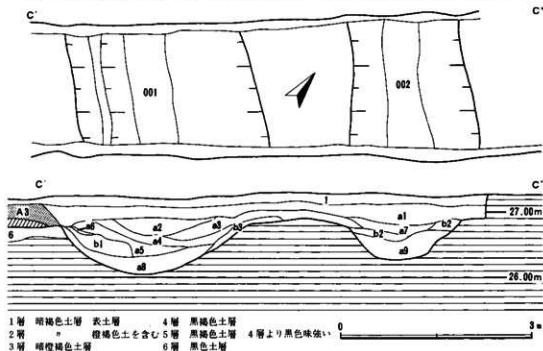
A層 黒色土主体層 a層 黒褐色土主体層  
 B層 橙褐色土主体層 b層 橙褐色土主体層  
 C層 暗茶褐色土層

ど堆積していなかったことから、「二重土手」がもともとのものでないことが明らかとなった。近年になって、一重の野馬土手が掘削された結果、二重土手状を呈するようになったものである。このことについては、次のCトレンチの項で再度触れることにする。

### Cトレンチ

野馬土手1北半部の二重土手状の部分と南半部の一重土手の間は、約60mにわたって土手とぎれて平坦地となっている。本トレンチはその平坦地に設定した幅2m、長さ19mのトレンチで、Aトレンチ同様、木戸跡の検出を目的とした。現地標高は27.3m。人力で発掘したA・B・Dトレンチが遺物を出土しなかったこともあって、Cトレンチでは時間節約のため、遺構確認面までは小型重機を投入した。遺構確認面の地山層はA・Bトレンチ同様、橙褐色のロームである。重機掘削後の遺構確認面の精査により、Cトレンチ東部において二条の溝を検出した。この溝はA・Bトレンチ検出の溝とつながるものである。現地表から遺構確認面まで40~60cmを計る。001の遺構確認面での幅は2.8m、底面幅は60cm、遺構確認面から底面までの深さは約90cmを計る。002の遺構確認面での幅は1.8~2.0m、底面幅は50~70cm、遺構確認面から底面までの深さは65cmを計る。001と002を合わせた幅は6.2mである。

さらに、Cトレンチの調査では断面観察中に001の西側に野馬土手1の土手下部が遺存していることに気付いた。トーンで図示した部分が盛土である。ただし、西側の裾(C3層)はやや流れていると思われる。東側の盛土(A3層)もa1層との区別が不明瞭であるが、溝001から直接に立ち上がってくるとと思われる。盛土は黒褐色土(A層)、橙褐色土(B層)、暗茶褐色土(C層)を交互に積んでいる。溝掘削時の排土を盛ったことがB層の存在より分かる。盛土、すな



わち土手の基底幅は5.4mである。また、土手と溝を合わせた幅は11.6mである。遺物は出土しなかった。

Cトレンチの調査で、野馬土手を検出したことにより、A・B・Cトレンチ検出の溝は野馬堀であり、また、野馬土手1北半部は現地表面では土手を見ることができないがもともとは存在していたことが明らかになった。このことは、P.L. 1に使用した航空写真によって補強されることとなった。この航空写真は1967年に撮影されたものであるが、この写真を見ると当時は野馬土手1北半部の土手が存在していたことが分かる。したがって、Bトレンチ周辺が二重土手状になっていることや、A・Cトレンチ周辺の土手がとぎれていることは、近年の土地利用の結果であることが判明した。

CトレンチにおいてもAトレンチ同様、木戸跡の検出ができなかった。ただし、Cトレンチ西部の土層をみると、3層を除いては比較的黒色味が強い土が厚く堆積しており、木戸が簡単な施設であれば検出が難しいと思われる。

#### Dトレンチ

野馬土手1全体としては中央部、土手部分に設定した幅2m、長さ11mのトレンチである。現地表高は土手頂部で28.60m。野馬土手1の走行方向は実際には北西-南東に近いが、便宜的に南北とすると、土手の東側は南方から小さい谷が入り込んでおり、Cトレンチ周辺まで及んでいる。一方、土手の西側は現状では舗装道路になっているが、地元の方の話によれば舗装道路となる以前は窪んでいたということであり、地形的にも西側に野馬堀が存在していたと考え

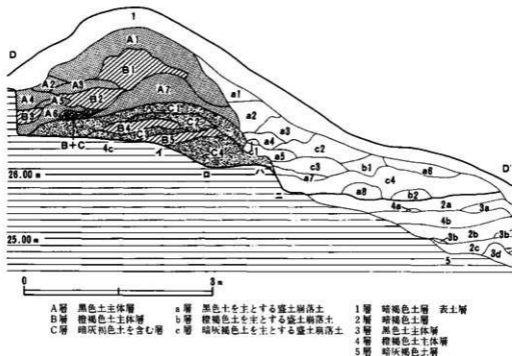


fig. 7 Dトレンチ断面図



で差支えないと思われる。

野馬土手頂部から地山層(4c層)までは2m強を計る。土手下部の地山層はA・B・Cトレンチ同様、橙褐色のローム層である。谷が入り込んでくる関係か、AトレンチからDトレンチまで立川ローム層が見られない。ただし、野馬土手1の西方の台地は区画整理に伴う工事作業が行われていたが、そこでは立川ローム層の堆積が認められたことを付記しておく。盛土は基本的には3層に分けられる。トーンで図示した部分が、表土を除く盛土の断面である。A層は黒色土を主体とする層、B層は橙褐色土を主体とする層、C層は暗灰褐色土を含む層である。B層の橙褐色土は4c層からの供給であり、C層の暗灰褐色土は4c層の下層の5層からの供給である。次に盛土の工程について述べる。Dトレンチの調査の結果、まず、盛土を始める前に地山層の橙褐色土層(4c層)を整形していることが分かった。ハ～ニのCuttingは盛土幅、すなわち野馬土手幅を規定したものである。そして、イ～ハ間をCuttingすることによってロ～ハの平坦面を作り出している。ロ～ハ間は平坦というよりも、ハからロに向かって緩く傾斜している。これは盛土の谷側への流失を防ぐための措置と思われる。盛土は最初、東の谷側斜面から盛られている。C4層は谷側斜面の表土を多く含む土層であり、その上のB5・B4層は谷側表土下の橙褐色土(4層)を多く含む土層である。C1層は谷側の橙褐色土層下の暗灰褐色土層(5層)を主体とする土層である。C1層の上部に黒色土層(A7層)が厚く盛られていることから、谷側からの土の供給はC1層で終わったと考える。すなわち、A7層はおそらくは西側の道路下にあると予想される溝部分の表土を盛ったものであろう。したがって、C4層からC1層までを第一段階の盛土とすることができよう。溝の掘削はC1層の盛土が終わった後に始められた。A7層以上の盛土は溝部分の排土を順次積み上げていったものである。これを第二段階の盛土とすることができよう。溝部分の排土を土手の盛土にあてる作業を最初に行わなかったのは、谷側に土が流失するのを避けるためであったと思われる。盛土は全体としては比較的硬質であるが、上部は根の影響を受け軟質化している。そのため、かなりの土が谷側斜面に流失し、溝側もまた同様と思われる。Dトレンチ東部は盛土の流失土と自然堆積土との区別が難しい。一応、2a層以下を自然堆積土層としたが、c4層、a8層、b2層も自然堆積土層の可能性もある。野馬土手幅は4.3m以上、土手の現存高はニを基点とした場合、2.8mである。なお、野馬堀は土手北半部においては土手の東側にあり、南半部においては西側にあると思われるが、これは地形を考慮した結果であろう。出土遺物なし。

## 小 結

ここで野馬土手1に関わる計測値を整理しておく。

野馬土手 幅 4.5m以上、5.4m以内、高さ2.8m

野馬堀 001 幅 2.8～4.0m, 002 幅 1.8～2.3m, 001+002 幅 5.7～6.5m

野馬土手と野馬堀を合わせた幅 11.6m

## 2. 野馬土手2

野馬土手2の調査対象面積は約1,900㎡、調査範囲での総長は、約350mである。野馬土手1とはほぼ直交するように築かれている。野馬土手の走行方向を便宜的に東西とすると、東半部約130mは遺存状態が良好である。土手と北側斜面との間はやや窪んでおり、野馬堀の存在が予想された。一方、西半部約220mは野馬土手に沿って北側に砂利道があるため土手が半壊している。この砂利道により野馬堀は埋められている。調査地の西方にも元は野馬土手が存在していたと思われるが、現地表面上では見ることができない。

### Eトレンチ

野馬土手2に設定したトレンチはEトレンチ一ヶ所である。もう一ヶ所設定したかったが、残念ながら時間不足のため断念せざるを得なかった。Eトレンチは野馬土手2の東部に設定した幅2m、長さ11.5mのトレンチである。現地表高は野馬土手頂部で18.80m。

発掘調査の結果、予想通り土手の北側で溝を検出した。遺構番号003。位置は予想通りであったが規模は予想よりも小規模であった。幅は2.8m、現地表面からの深さ1.3m、野馬土手頂部からの深さ2.2mを計る。次に野馬土手2の盛土について述べる。トーンで図示した部分が、表土

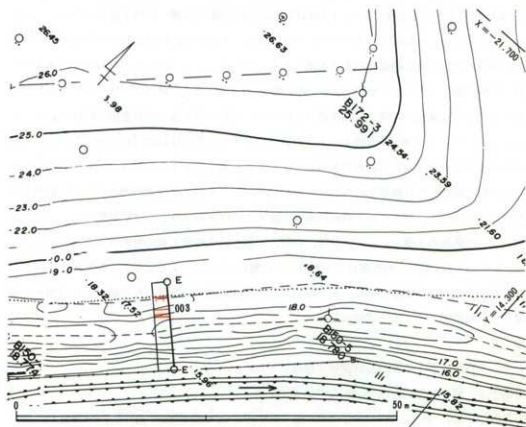


fig. 8 Eトレンチ

を除く盛土の断面である。盛土の幅，すなわち，野馬土手の幅は谷側の裾が不明瞭であるが，およそ4 m，土手の現存高は約2 m，野馬土手と野馬堀を合わせた幅は6.8 mである。盛土は基本的には4層に分けられる。A層は黒褐色土層，B層は橙褐色土を多量に含む層，C層は黒灰色土層，D層は橙褐色土を含む暗茶褐色土層である。盛土は全体としては土手南の谷側から北側の斜面，溝のある方に向かって傾斜している。2a層（黒褐色土層）を地山基底面としてその上に盛っている。盛土はまず最初に黒褐色土層を盛っている（A3層，A4層）。A3層により谷側の盛土裾を規定している。ただし，A3層は流失土（a4層）および地山層（2a層）との区別が難しいため，盛土裾はやや不明瞭である。トーンよりも若干内側とも思える。あるいは谷側の盛土裾は築造当時あまり意識されていなかったかもしれない。野馬土手2の盛土はB3層以上については北側斜面からの供給と考えられるが，A3層については谷側から盛られた可能性もあると思われる。次に橙褐色土を比較的多く含む土や橙褐色土と黒褐色土との混合土層を盛っている（B3層・A+B層・B2層）。これらの土層は北側斜面の表土層およびその下層の橙褐色土層（3層）を盛ったものであろう。そしてその上には茶色味を帯びた土を盛っている（B1層・D4層・D3層・D2層）。これらの土層は北側斜面の4層，5層より供給された土が多いと思われる。その上のC層は上下層とは明瞭な差がある特異な層で，野馬土手1のC層に似ている。トレン

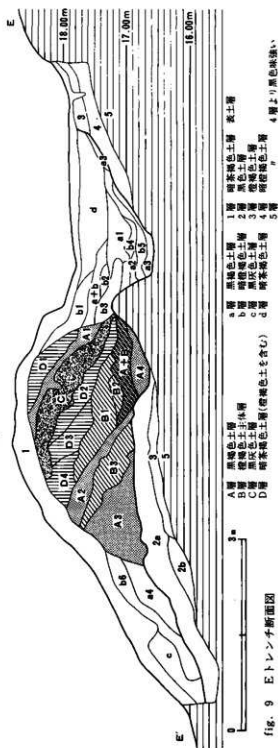


fig. 9 Eトレンチ断面図

チ内の自然堆積土には見受けられなかったので、北側斜面のより上部からの採土であると考えられる。溝003の掘削はC層の盛土がなされてから行われたものと考えられる。というのも、C層の上の土層を見ると、黒褐色土層(A1層)と橙褐色土を含む暗褐色土層(D1層)であり、この部分の盛土に溝掘削時の排土をあてていると思われるからである。また、003の規模では野馬土手2の盛土量をまかなえないこと、そして、溝を早く掘削してしまうと野馬土手の築造がしくくなることも理由としてあげられる。

野馬土手2の盛土は野馬土手1よりも全体としてはやや軟質である。特に上部は根の影響を受け軟質化している。そのため、溝側や谷側にかんりの土が流失している(b1層, a+b層, b2層, b3層, c層, b6層など)。溝については地山層(4層・5層)と覆土との色調差が少なかったため、掘り過ぎてしまったのは遺憾である。しかし、断面の土層観察により溝の断面形態をほぼ正確に把握することができた。溝から土手への断面形態を見ると、かなりの急勾配で立ち上がっていることが分かる。築造当時は野馬土手頂部にはもっと土量が存在したので、溝からの量感はより以上のものがあつたであろう。この急勾配の斜面を作り出すことによって、北側台地、すなわち牧に在る野馬が南方の谷に入り込むことを防いでいるのである。したがって、野馬堀は小規模であっても良かったであろう。

野馬土手2の盛土は北側斜面から広く求めたものである。溝、すなわち野馬堀の掘削は野馬土手の形がかなり整った後に行われ、それにより「野馬除」としての機能を持たせたものである。なお、Eトレンチにおいても野馬土手に伴う遺物は出土しなかった。

#### 小 結

ここで野馬土手2の計測値をまとめておく。

野馬土手 幅 4 m 高さ 2 m 野馬土手+野馬堀 幅 6.8 m

野馬堀 幅 2.8 m 堀底面から土手頂部までの高さ2.2 m



fig. 10 Aトレンチ発掘風景

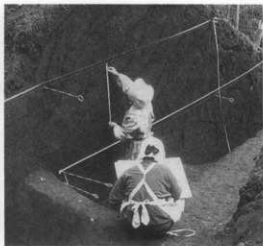


fig. 11 Eトレンチ実測風景

### III. まとめ

江戸時代、下総台地には広大な野生馬の放牧地が存在していた。小金牧は下総台地北西部に展開する牧で、現在の野田市から千葉市北部にまたがり、また、やや離れて白井町・印西町に所在する。小金牧には内牧が六牧ある。北から荘内牧、高田台牧、上野牧、中野牧、下野牧、そして印西牧である。享保7年に享保の牧改革により荘内牧が廃止されてからは小金五牧と称されるようになった。一方、下総台地中央部から北東部にかけては佐倉牧がある。内牧は7牧である。各牧には野馬を捕獲するための捕込があって原則として年一回捕馬が行われ、優良な馬は幕府に、それ以外は庶民一般に払い下げられた。今回、調査した高柳新田所在野馬土手は中野牧の一部であり、東端に位置する。調査地周辺は野馬土手が入り組んでいる。

野馬土手は一般に野馬除土手ともいわれている。名称の問題を取り上げた河野達二氏は「野馬除土手」あるいは「野馬除土手堀」を一般化したいと提唱している<sup>1</sup>。その理由の第1点として近世文書にも「野馬土手」と記したものが数稀で「野馬除土手、野馬除土手堀」の用語が多いということ、第2点としては土手・堀によって野馬が除け、あるいは野馬を除けることに期待をかけていると考えられる、ということを挙げている。しかし、古文書では「野馬除土手」以外にも「囲土手」や「勢子土手」がかなり使われている。また、第2点の理由の野馬を除けることに期待をかけているというのは土手の外、すなわち耕作農民側からだけの観点のように思える。土手の内側、すなわち牧から見た場合には「野馬囲土手」の方がむしろ適切であろう。ただし、「野馬囲土手」は近世文書では傷病馬の収容等の特殊な場合に使われたようなので、一般化するのには問題かもしれない。本書では「野馬土手」を使用した。その理由は「野馬除土手」、「野馬囲土手」、あるいは「勢子土手」や「境土手」、「古土手」等のあらゆる用例の総称として使用したかったからである。したがって、「野馬除土手」という用語を否定するものではなく、状況に応じて使い分けすればいいのではないかと考える。その場合、野馬土手2は南方が水田と思われるので「野馬除土手」としての性格を強く持っていたであろう。それに対し、野馬土手1はその性格づけに苦慮するものがある。というのも、野馬土手1の西方が牧であったのか、畑地であったのか明瞭でないからである。野馬土手1の東方については畑地とすると、野馬土手2を築造する理由がなくなるのでまず牧と考えて疑い得ないところである。一方、野馬土手2の西方が畑地であったとすると、中野牧捕込との位置関係考えた場合、捕馬が行いにくくなるのではないかとと思われる。しかし、調査地周辺の小字名を見ると、野馬土手1の東方がメ切内、西方がメ切外であり、西方は牧外のように思える。そうであるとすると、野馬土手1は西方から見た場合「野馬除土手」ということになる。それに対し、野馬土手1の

#### 註

1 河野達二 「小金下野牧南部における「野馬除土手」の考察」房総の牧第4号 房総の牧研究会1988

西方も牧であったとすると、野馬土手1に野馬除の性格はなく、「勢子土手」等、野馬管理上の土手ということになる。勢子土手の中には適当な間隔を置いて幾つもの開放地点を作った土手がある。このような土手は捕馬の際、効果が上がるように工夫されたものである。野馬土手1にはこのような工夫は認められないが、木戸が存在する場合には同様の機能を果たしたかもしれない。野馬土手1の性格については前者のほうが妥当であるように思われるが、今後、中野牧の範囲、捕馬に伴う野馬の追い込み経路、農地、特に新田畑開発と野馬土手、あるいは將軍鹿狩りと野馬土手等、個別の研究が進展することを期待したい。

野馬土手1東方はメ切内、西方はメ切外という小字であることから、発掘調査にあたっては木戸跡の検出に留意したことは既に触れたところである。調査では残念ながら木戸跡の検出を果せなかったが、調査地全体を発掘しているわけではないので木戸跡が存在しないとは必ずしも断言できない。また、Cトレンチ周辺は黒色土の堆積が厚いため、木戸跡が存在してもその検出は困難と思われる。しかし、調査結果および航空写真の観察からは調査地内に木戸跡が存在する可能性は薄いように思われる。地元の方の話によれば、より北方の地点に木戸跡らしいものが存在するという事であり、あるいはそうであるのかもしれない。松戸市高柳新田には元木戸という地名が残っているので高柳新田に所在する野馬土手のどこかには木戸が存在したことは確かであろう。

本遺跡の調査では野馬土手に伴う遺物が出土しなかったため、築造年代については明確でない。ただし、土手が比較的大規模であるので、享保八年(1723年)以後の「新土手」ではなく、「古土手」と思われる。遺物は出土しなかったものの低地や緩斜面に立地する野馬土手の築造方法の一端を明らかにできたことは有意義であった。今後、本遺跡の成果が野馬土手の研究、ひいては小金牧の研究に少しでも寄与することを期待して結びとしたい。最後になりましたが、房総の牧研究会の河野達二氏には色々とお世話になりました。ここに記して謝意を表します。

#### 注

1. 資料を実見していただいた河野達二氏によれば、中世に遡る可能性もあるという。その場合は中野牧に対する理解の仕方が変わってくる。中世以前の野馬土手、牧の実態についてはあまり明確ではない。野馬土手という近世の所産と思いがちであるが、下総国が古代以来の有力な馬の生息地域であることを考えると、想像するよりも豊かな実態を有していたかもしれない。この点は今後の検討課題である。

#### 参考文献

- 松下邦夫 『改訂新版 松戸の歴史案内』郷土史出版 1982  
『松戸市史 中巻 近世編』松戸市史編さん委員会 1978  
『千葉県の文化財』千葉県教育委員会 1980  
『千葉県流山市 向原野馬土手』流山市遺跡調査会 1983  
『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V』財団法人 千葉県文化財センター 1986  
『柏のむかし』柏市史編さん委員会 1976

## 図面・図版

P L.1 高柳新田所在野馬土手周辺の航空写真 ▶  
 (1967年3月19日撮影)

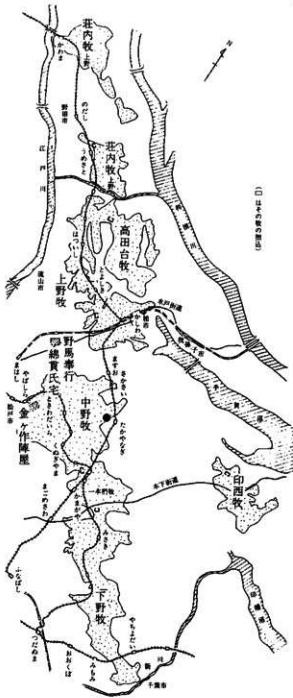


fig. 12 小金牧各内牧の分布図

(『松戸市史中巻近世編』1977 P 207  
 第43回享保7年実測の小金牧各内  
 牧の略図より転載)





野馬生野所在田舎

1. 野馬土手1 近隣1)  
(北西から)



2. 野馬土手1 近隣2)  
(北から)



3. 野馬土手1 近隣3)  
(南東から)



1. 野馬土手1近景(4)  
(南東から)



2. Aトレンチ 001・002  
(東から)



3. Bトレンチ 001・002  
(東やや南から)



1. Cトレンチ 001・002  
(北西から)

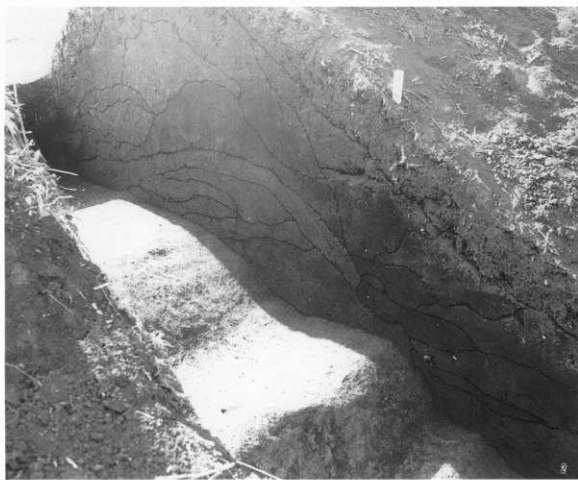


2. Cトレンチ 001・002  
(南東から)



3. Cトレンチ野馬土手1  
遺存部断面(南東から)





1、Dトレンチ野馬土手1断面(南から) 2、Dトレンチ野馬土手1地山整形(東から)



1. 野馬土手2近景1(西やや南から) 2. 野馬土手2近景2(南から)



1. Eトレンチ野馬土手2・003断面(西から) 2. Eトレンチ野馬土手2断面(南西から)

千葉県文化財センター調査報告第165集  
松戸市・沼南町 高柳新田所在野馬土手  
高柳土地区画整理に伴う埋蔵文化財調査報告書

---

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 住宅・都市整備公団 首都圏都市開発本部  
東京都新宿区新宿4丁目3番17号

編集 財団法人 千葉県文化財センター  
千葉県千葉市葛城2丁目10番1号

印刷 有限会社 正文社  
千葉県千葉市都町2丁目5番5号

---